

株式会社JSOL

“ACMS ApexはEDI通信ソフトの「F1」エンジン”

ミッションクリティカルなEDIサービスの後継通信ソフトとしてJSOL-EDIが採用

課題

ACMS E²X販売終了とサーバ更改で
可用性の高い後継通信ソフトの選定が必要

ACMS ApexとJSOL-EDIの
アプリレイヤに親和性を感じつつも
ACMS E²Xとの差異点を懸念

ACMS Apex

評価

コスト削減も実現しながら
ミッションクリティカルサービスを提供

DALの迅速な機能改善により
スケジュール通りにサービスリリース

豊富なノウハウと
先進的な技術を用いて
一貫したトータルソリューションを提供

JSOLは、株式会社NTTデータと株式会社日本総合研究所が出資する「ITサービスコーディネーター」だ。ITコンサルティングから、システムの構築・運用にいたるまで、一貫したトータルソリューションを提供している。支援しているお客様の業界は幅広く、製造、流通・サービス、金融、公共機関など多岐にわたり、豊富なノウハウと先進的な技術、そして最後までやりぬく熱意で、お客様の価値向上に貢献している。

40年以上の実績を持つEDIサービスで
ACMS Apexへの移行を検討

JSOLは、40年以上にわたる実績を持つEDIサービスのパイオニアだ。1983年に通信回線

の規制緩和を受け、第1号の「中小企業VAN」サービスを開始してから現在に至るまで、EDIサービスを提供し続けている。

JSOL-EDIサービスは、標準機能が豊富なだけでなく、複雑な振分処理や蓄積処理が可能であり、ミッションクリティカルなEDIを支え、顧客から高く評価されている。また、24時間365日の運用サポートを提供し、深夜や休日の不具合にも迅速に対応する体制を整えている。JSOLはデータ・アプリケーション（以下、DAL）のEDIソリューションを早くから見出した企業でもあり、2000年代当初にオープン化して以降、UNIX対応EDIソフトウェア ACMS/UXや企業間電子商取引向けB2BサーバACMS B2B、企業間および企業内のデータ連携を実現するACMS E²XをEDIサービスの通信ソフトとして利用してきた。

2018年、そのACMS E²Xの販売終了が2019年3月となることがわかり、システムを動かすサーバの老朽化もあって、次の製品選定を検討することになった。

それでは、どの製品を後継の通信ソフトとするか。同社は、サーバOSとしてLinuxを選んでいた。ACMSシリーズは、当時、Linuxに対応している数少ない製品の1つであり、そこで視野に入ってきたのが、ACMS E²Xの後継となるエンタープライズ・データ連携プラットフォーム「ACMS Apex」だった。ACMS Apexの管理サーバは稼働系と待機系で二重化されており、可用性が高い構成である。メンテナンスの際には稼働系を待機系にスイッチさせることで、システムを停止させずにメンテナンスを行うことができる。また、ACMS Apexはプロセスが停止した際にエラーを検知し自動で復旧するため、システムエンジニアが手動でプロセス起動を行う必要がなくなり、運用面では静観することが可能となる。これによりダウンタイムの極小化やシステムエンジニアの作業負担軽減にもつながると考えられた。これらの機能が24時間365日ミッションクリティカルなサービスを提供している同社にマッチしていた。

JSOL

NTT DATA Trusted Global Innovator
NTT DATA Group

株式会社JSOL

設立 2006年7月
本社所在地 東京本社 東京都千代田区九段南1-6-5 九段会館テラス
大阪本社 大阪市西区土佐堀2-2-4 土佐堀ダイビル
従業員数 1,350名(2024年04月現在)
資本金 50億円
代表 代表取締役社長 永井 健志



上席プロフェッショナル ITアーキテクト
香坂 真人 氏

株式会社JSOL
ソーシャルトランスフォーメーション事業本部
システム開発第一部



課長
石田 久幸 氏

株式会社JSOL
ソーシャルトランスフォーメーション事業本部
システム開発第一部 第3課

高度なEDIサービス実現に向けた DALの迅速な対応を評価

しかし、ACMS ApexはACMS E²Xの後継とはいえ、JSOLから見ると細かい挙動に差異があった。今回のサービス基盤更改では、一部の接続先について何も手立てを講じないと接続先側の運用を変更しなければ移行できない状況だった。その状況を知ったDALは、極めて速いスピード感で機能改善を実施し、JSOLが予定していたサービスリリースに間に合わせた。

株式会社JSOL ソーシャルトランスフォーメーション事業本部 システム開発第一部 課長 石田久幸氏は、次のように語る。「ACMS ApexとACMS E²Xは設計思想が共通しており親和性が高いシステムではありましたが、サービス基盤更改のシステムテストを行った際に一部機能改修をしないと本番環境にリリース出来ないことが分かりました。初回本番稼働が迫り、スケジュールが非常に綱渡りの状況でした。しかし、DALは1、2か月という短い期間で機能改修を実施のうえACMS Apexのバージョンアップを行い、私たちも何とか予定していたサービスリリースに間に合わせることができました。これまでの付き合いからDALには絶対的な信頼がありましたが、私たちの要望に真摯に対応してくれて助かりました。」

中断が許されないサービスを支える ACMS ApexはEDIサーバの 『F1』エンジン

また、ACMS Apexは、先進性とミッションクリティカルという、両立が難しい要素を極めて高いレベルで実現していると同部の上席プロフェッショナル ITアーキテクト 香坂氏は語る。「ACMS Apexは、エンジンに例えるとEDI通信ソフトの『F1』エンジンです。先進性という意味ではバージョンアップのしやすさがあります。ACMS E²Xはシステム停止をしてバージョンアップすることが必要でした。しかし、長いシステム停止を回避したかった私たちは、プロダクトをその都度、新規で購入し並行稼働させることで、バージョンアップ時のシステム停止時間を短時間に収めるようにしていました。ACMS Apexではシステムを稼働させたまま、ほとんどボタン1つでバージョンアップができるようになり、ISO20022対応などの機能追加が必要な際にアジリティをもって対応可能です。これらはACMS Apexの版管理機能の概念にもとづいて実装されており、ACMS Apexそのもののバージョンのみならず、ACMS Apex上で動かすアプリケーションも版管理配下で制御可能です。もちろん何か想定外の事態が発生した場合、元の版への切り戻しも容易です。ミッションクリティカルという観点に関しては秒単

位にかなりのトランザクションが発生する環境において、遅延が発生することなく、処理をさばくことが可能です。この機能は当たり前のように思えるのですが、実はこのミッションクリティカル性を担保する機能自体がACMS製品の最大の強みではないでしょうか。」

他にも、ACMS Apexにはテナント機能があることで、複数ある本番環境を1ライセンスで稼働できるようになり、ACMS E²Xと比較すると保守料トータルが約半分に大幅なコスト削減を実現している。また、ほとんどの運用をGUI操作で行えるようになったことで、今までインフラチームが担当していた作業を運用チームに移管できるようになった。その結果、インフラチームはよりサーバ保守業務に集中でき、運用チーム編成の融通性も上がるというメリットも出ている。

今後、同社では企業の業務システム間やSaaS間のAPI連携ニーズが高まると考えている。ミッションクリティカルが求められるEDIサービスで培ったノウハウと、ACMS ApexのWeb API連携機能を掛け合わせることで、さらなるお客様ニーズに応えていく。また、ビジネスのグローバル化に伴いEDIの海外展開が本格化しており、グローバルに利用されているプロトコルやセキュリティに対して、ACMS Apexがさらに対応強化していくことに期待を寄せる。



※DAL, ACMS, ACMS Apex, E²X, WebFramer, RACCOON, AnyTran, OCRtran, Placulは、株式会社データ・アプリケーションの日本及び海外での商標または登録商標です。
※その他、記載されている会社名及び製品名は、各社の商標または登録商標です。※製品の仕様は予告なく変更する場合がありますので予めご了承ください。※掲載内容および企業に関する情報は、取材当時のものとなります。

DAL

株式会社データ・アプリケーション

〒104-0028 東京都中央区八重洲2-2-1
東京ミッドタウン八重洲セントラルタワー 27階
TEL. 03-6370-0909(代表) FAX. 03-3271-0066
E-Mail. sales@dal.co.jp URL. www.dal.co.jp